

「高齢化社会を迎え……」という文章の出だしは少し陳腐だが、確かにお年寄りが増えていることは間違いない。したがって、これからの日本昔話の出だしも確実に違ってくる。今までは、

「昔々ある所におじいさんとおばあさんが住んでおりました」

で始まっていたが、これからは違う。きっと

「昔々至る所におじいさんとおばあさんが住んでおりました」

で始まるようになってくるだろう。

お年寄りが増えれば欠損が増えていく。いままでよりは、無歯顎の人が少なくなるかもしれないが、欠損がなくなるということは、まず考えられない。とすると、そこには欠損補綴の出番がまわってくる。

欠損を修復する方法には、ブリッジ、インプラント、義歯などがあるが、どれもこれも、これが万能だというものがない。それぞれに長所短所、適応不適応がある。そこで、今回は、義歯臨床をとりあげることになったのだが、デンタルダイヤモンド社ならではの企画ができあがった。それは「1枚の写真ではじまる12人の義歯臨床」である。

自分の考えを文章で発表するとき、一番大切なものが「内容」であるのは言うまでもない。しかし、それを多くの人に読んでもらうためには、その内容をひと言であらわすタイトルと、文章表現のテクニックとしての「切り口」がとても重要になってくる。たとえば、義歯の印象採得について発表するとき、「義歯の形」から入ったり、「印象材の性状」を取り上げたり、「周囲組織との関連性」を考察したりする、ということがそれである。

今回の切り口は「1枚の写真」である。その写真は、それぞれの筆者がもっとも得意とする分野を象徴していて、その後の歯科人生に影響を与えたものになっている。その切り口から展開される語り口は読者を引きつけ、さらに読者の歯科人生にも大いなる影響を与えるものに違いないと確信している。